カウンセリングと人間観

山田　俊介（医学部臨床心理学科）

（2021 年 11 月 25 日受理）

Abstract:　カウンセラーになるためには、広範な知識や多様な方法を修得することが求められているが、様々な知識や方法を学習したとしても、それらがその人の中でモザイクのようにバラバラにまとまりなく存在している状態は望ましいものではない。それは、カウンセラーはクライエントに対して、単に知識や方法を用いているのではなく、一人の人間として向き合い、関わっているからであり、カウンセラーの働きかけには、一貫性と統合性が必要であるからである。本稿では、様々な知識や方法に統合をもたらすものであり、カウンセリングの土台となるものであるカウンセラーの人間観について考察する。

キーワード：カウンセリング、人間観、学派

Ⅰ．はじめに

公認心理師に対応した大学および大学院でのカリキュラムが 2018 年度からスタートして、今年度で４年目になる。これらのカリキュラムでは、広範な知識や多様な方法を修得することが求められており、それを達成することは容易なことではない。また、大学院においては、臨床心理士のみを養成していた時と比べ、公認心理師と臨床心理士の両方の資格取得を目ざす場合には、必要となる授業科目数、授業時間数が大幅に増え、学生はたいへん多忙になった。このような状況に置かれると、学生は必要とされる知識や方法を修得することが中心となり、それだけで精一杯という状態になりやすいのではないかと考えられる。それでは、必要な知識や方法を修得することができれば、カウンセラーになる上で十分であると言えるのであろうか。

野島（2021）は、「心理療法家に必要なものは『人間性』と『専門性』と言われています。九州では 50 年前から、『人間性』７割、『専門性』（知識と技術）３割と言われておりましたが、今でもそうだと私は思います。知識・技術を学ぶことは大事ですが、それだけでは援助していくのには充分ではありません」(p. 16) と述べ、知識・技術よりも人間性が大切であることを指摘している。また、前田（1978）は、「臨床家としての自分を育てることは、雑多にあれこれと知識を集めることではない。自分のなかに、中心となるべき『形』がなくては、どんな知識も身につかない」（p. 296）と述べ、様々な知識を断片的に吸収しようとすることは適切でないとしている。これに関連して、鑪（2018）は心理臨床の方法について述べ、「心理臨床家は、常に一人の人間として、自分の行動と技法のうえに、統合されたまとまりを持っていることが求められる。バラバラな思考やまとまりのない働きかけは、クライアントを混乱させてしまいやすい」(p. 15)、「私たち心理臨床家の道具も同じである。これは主に〈言葉〉の秩序であり、〈経験〉の秩序である。それは一貫した法則に従い、その心理臨床家のなかに統合されて存在するものでなければならない。この点で、モザイク的な折衷的なやり方は、心理臨床家自身をバラバラのモザイクにしてしまい、結果的にはクライアントの統合よりも、心のなかの分裂をさらに促進させ、モザイク的にしてしまう可能性がある」（pp. 15-16）としている。つまり、心理臨床の技法や働きかけには、一貫性と統合性が必要であり、それらに欠けるバラバラな働きかけは、クライエントを混乱させてしまう危険性があるということである。そして、鑪（1977）は、「カウンセラーにとっ

て大事な点は、自分自身がどのような観点や枠組をもっているのかを自分自身に明らかにしておくことである」(p. 74)、「自分はどのような人間観を持っているのかを明確にし、そのような人間観や関心や枠組が、他人と出会い、かかわりをもち、相手をとらえる際に、どのようなかかわり方となるのか、とらえ方となるのか、ということを、自分自身で知っていく努力を怠ってはならない」(p. 74) と述べている。

このように、様々な知識や方法を学習したとしても、それらがその人の中でモザイクのようにバラバラにまとまりなく存在している状態は望ましいものではなく、それらをどのように統合し、一貫性のある働きかけにつなげていくかが非常に重要となる。そして、知識や方法に統合をもたらしてくれるものに、人間観や「枠組」・「形」があると考えられる。

Ⅱ. 人間観の重要性

それでは、カウンセラーの人間観については、どのように考えられているのであろうか。小林 (1976) は、「カウンセラー、心理学者、サイコセラピストたち自身の価値観や人間観そのものが心理学の知識や技術以上にカウンセリングやサイコセラピーでは重要な役割を演ずる」(p. 23) と述べている。同じように、澤田 (1979) も、「カウンセラーは、カウンセリングに関する知識と技術を身につけてさえいればよいというものではない。実際にそのカウンセラーがどのようなカウンセリングを行っていくかは、カウンセラー自身の人間観と価値観が重要な役割を担う」(pp. 2-3) としている。このように、カウンセリングにおいては、カウンセラー自身の人間観や価値観が重要な役割を担っていると考えられている。また、高垣 (2010) は、「どういう人間観をもつかということが、対人援助の根本にあるからです。人を援助しようとするときに、その人がもっている人間観は、その土台になるわけです」(p. 116) と述べている。さらに、伊藤 (2003) も、「心理カウンセラーが人間観をもっていなければ心理カウンセリングをおこなうことは全くできないからです」(pp. 42-43)、「心理カウンセラーのおこなう心理カウンセリングとはその心理カウンセラーの人間観によって決まるので、私は来談者は、何をさて措いても、その心理カウンセラーの人間観を確認すべきだ、と主張したいのです」(p. 43) としている。この両者とも、カウンセリングにおいて、カウンセラーの人間観はその土台であり、なくてはならないものであり、カウンセリングのありようを決めるものであることを指摘している。

カウンセラー自身の人間観が重要な役割を持っている理由については、小林 (1976) は次のように述べている。「カウンセリングという援助活動では、カウンセラーやサイコセラピストのもつ理論や技術よりも人間自身が問われるからである」(p. 24)、「理論や技術をもつ心理学者、カウンセラー、サイコセラピストらが、現実にはどのような人間観をもって生きているか、その人間観は自分の理論や技術と一致するかどうか、換言すれば、彼らが単なる技術屋であろうとするのかどうかという問題が、彼ら自身に問われている」(p. 25)、「カウンセリングやサイコセラピーは、単なる理論や技術ではなく、これらを有する人間自身の働きである」(p. 25)。すなわち、カウンセラーはクライエントに対して、単に知識や技術を用いているのではなく、一人の人間として向き合い、関わっているからである。そうすると、カウンセラーはクライエントを含めた人間存在をどのように見ているのかということがおのずから問われてくる。また、台 (2011) はカウンセリングにおいては、「実践を進めるうちに、クライアントに対して薬物などの手段をもたずに、心とそれを実際に表す振舞いだけで面と向かわざるをえないことをはっきりと自覚する。つまり人間観を身をもって表すことー観念にとどまらず、具体的なはたらきとして表すことーである。そしてこれは、心理療法の場においてはとくにすぐれて、明らかに表される」(p. 4) と指摘している。つまり、カウンセラーの人間観は問われるだけではなく、カウンセリングの場に表わされるものであると考えられている。クライエントに対して何らかの技法を用いて働きかける場合においても、飯田 (2008) が、「『技法を用いる』ということも繰り返しになるが、『技法』だけが何か浮き出て、クライエントに作用するのではなく、治療者の人間性や人間観を土台とした“技法”がクライエントに（よい意味でも悪い意味においても）作用するのだと考えられる」(p. 21) と述べているように、技法が単独でクライエントに作用する

のではなく、カウンセラーの人間観、人間性とのつながりの中で作用するといえる。このように、様々な知識や方法が、カウンセラーの人間観を基に、カウンセラーの中で統合され、一人の人間としての関わりとして表わされることがたいへん重要となる。そうでなければ、様々な知識や方法がカウンセラーの中でバラバラに存在し、その働きかけもバラバラでまとまりのないものとなってしまうし、カウンセラーは一人の人間として関わっているというよりも、知識や方法を単に用いているという存在になってしまう。以上のように、カウンセラーの人間観は、カウンセリングの土台であり、なくてはならないものであり、カウンセリングの場に表わされるものであるといえる。

なお、ここでカウンセラーの人間観とは、他者をどのような存在として見るかということにとどまるものではない。台（2011）は、「治療者もまた人間の一人なので、この人間観は、自分を含めた人間についての考えであり、心理治療の実践の実りがまた自分にもどってくるということにもなる」（p. i）と述べ、カウンセラー自身も含むものであることを指摘している。また、小林（1976）は、「一人の人間が、時と場所に応じて人間観を変えるということは、人間に対する態度や姿勢を変えることにほかならない。もしこのような人間があるとすれば、それは恐ろしいことである」（p. 41）、「なぜなら、“自分が人間であるということは、自分にとってどういうことを意味するのか”という問いから逃避する自己喪失の行動と考えられるからである」（p. 41）としている。このように、カウンセラーの人間観は、カウンセラーが自分自身をどのような存在として見ているのかということも含むものであり、従って、その時その時の場面や相手によって変化するようなものではなく、一貫したものである。そのため、「この人間観は、その人のカウンセリング面接過程のみならず、その人自身の生き方や人間関係にも密接な関係をもっている」（小林、1985、p. 3）といえよう。

Ⅲ．カウンセラーの人間観

それでは、カウンセリングを実践している者は、どのような人間観を持っているのであろうか。次のように、人間観を提示しているカウンセラーも存在する。

小林（1985、p. 8）は、人間学的実存的アプローチの人間観として、次の６つの見方を上げている。①「人間は前進的に行動し、かつ反応する存在である」、②「人間は自己を知り、意識することができる存在である」、③「人間は自由に選択することができる存在である」、④「人間は志向的存在である」、⑤「人間は現存在である」、⑥「人間は超越的存在である」。

伊藤（1995、p. 91）は、自身の人間観として、次の４つの見方を上げている。①主体的な存在、②独自的な存在、③創造的な存在、④社会的な存在。

また、澤田（1999、p. 3）は、カウンセリングの基礎をなしてきた人間観として、実存的アプローチを上げ、次の３つの見方を上げている。①「人間は選択の能力をもつ」、②「人間は自己の経験に対して、目的、意味、価値を与える」、③「人間は自己および現時点の諸状況の限界を超越する能力をもつ」。

さらに、江川（2009、p. 32）は、「従来、さまざまなカウンセリング理論と技法が提唱されてきたが、それらのすべてが正しい人間観に立っているとは言い難い。もちろん、事実に基づいた人間観、つまり正しい人間観によって相談活動に当たることが大切である」と述べた上で、次の５つの見方を上げている。①変化・発達する存在、②独自性を有する存在、③主体性を有する価値志向的存在、④両面性を有する存在、⑤相互影響関係を有する社会的存在。

これらの人間観を比較すると、人間は選択することができる主体的な存在であるという見方は共通しているが、他の見方は異なっている点がある。このように、すべてのカウンセラーは共通する人間観を持っている訳ではなく、「それぞれの治療者は固有の人間観をもつ」（台、2011、p. 6）といえる。それとともに、「カウンセリング心理学、心理療法においては、理論の創設者である人間観が色濃く反映されており、大きな影響を及ぼしているのである」（宮崎、2009、p. 27）、「心理療法にはある種の人間観が浸みこんでいる。この人間観は当の治療法を初めて用いた人物－創始者－がもつ人間観を反映している」（台、2011、p. 6）と考えられている。すなわち、様々な学派、理論的立場のカウンセリングや心理療法は、その創始者の人間観と深く結びついているということである。

Ⅳ．カウンセリングの学派と人間観

カウンセリングや心理療法において、様々な知識や方法に統合をもたらしてくれる「枠組」・「形」を提供しているものに学派、理論的立場がある。これに関して、前田（1978）は、「臨床家が臨床家になるためには、自分の内なるリビドーにかりたてられ、自分を生かす『形』を求めること。たとえば自分のもっとも気に入った臨床家や、その周辺の少数の臨床家の書いたものと数年間、親密にくらしてみること」（p. 296）と述べている。これは、特定の心理臨床家の著作に親しむことが、カウンセリングで自分を生かす「形」の形成につながることを示している。また、河合（1986）は、「心理療法においては、治療者が自分の存在をかけて、その仕事にcommitすることが必要である。しかし、存在をかけて commit するということは、言うはやすく行うは難しいことである」（p. 145）とした上で、心理療法における「型」と学派について、次のように述べている。「われわれがクライエントに対してcommitしてゆくときに、その『型』を与えてくれるのが、それぞれの学派であると考えてはどうであろうか。そして、それぞれ少しぐらいうまくゆかないとしても、自分の型が悪いのだからと考え直し、やり抜こうとしてこそ、われわれはよりいっそうそれに自分の存在をかけてゆけるのである」（p. 146）、「そのとき、ともかく自分はこの学派によってやるのだから、というところがないとなかなか進まないものである」（p. 146）。このように、学派はカウンセリングにおいて、自分の存在をかけてcommit していく時の「形（型）」を与えてくれると考えられている。

カウンセリングには様々な学派、理論的立場があるが、国分（1980、pp. 19-20）は様々な立場を紹介する中で、理論を構成する内容として次の６つを上げている。①人間観、②性格論、③病理論、④治療目標、⑤カウンセラーの役割、⑥クライエントの役割。このように、カウンセリングの各学派の理論は人間観を含んでいる。そして、宮崎（2009）は、「そのカウンセリング理論の土台に潜在的に横たわっている人間観を抜きにしてその理論を語ることは不可能なのである」（p. 28）としている。さらに、伊藤（1995）は、「現在、さまざまなカウンセリングの理論が唱えられているが、ときにはそれらの間に、きわめて大きな違いがみられる。その違いは、そのカウンセリング理論の背後にあって、それを支えている人間観あるいは世界観があり、その相違から生じてくるものである」（p. 91）と述べている。すなわち、人間観が理論の違いのもとになっていると指摘している。

また、「創始者の人間観は治療理論のみでなく、治療法にまで浸みこんでいるとみられる」（台、2011、p. i）と言われているように、人間観は理論とだけではなく、その学派の方法とも結び付いている。たとえば、クライエント中心療法の創始者であるカール・ロジャーズ（1951）は、「人間の意義と価値を強調するオリエンテーションを身につけようとすでに努力している人のほうが、この考え方を実現するクライアント中心の技術をむしろたやすく学べるのである」（p. 25）と述べている。すなわち、「他人の意義や価値に対する心からの尊敬を感じる」（p. 26）ような人間観とクライエント中心療法の方法とが結び付いていることを指摘している。この点について、中田（2019）もクライエント中心療法から発展したパーソン・センタード・セラピー（ＰＣＴ）について、「ＰＣＴを特徴づけるのはセラピーの理論ではなく、人間観である」（p. 85）、「Th がその人間観を深く理解するほど、その実践にもその人間観が滲み出て、ＰＣＴを特徴づける」（p. 85）と述べている。

このように、学派の人間観は、その理論や方法と深く結びついている。それらをバラバラにしてしまうことは、その本質が失われてしまうと考えられる。カウンセリングを学ぶ人の中には、様々な学派の理論や方法の良いところを集めれば、あるいは、クライエントによって適したものを使い分ければ、最もよい援助になるのではないかと考える人も少なくない。はたして、そのようなことが可能なのであろうか。この点について河合（1986）は、「それぞれの学派の理論は、強烈な個性から生じてきたものとして、それなりのintegration をもっている。そこで、いろいろな学派からいいところを取ろうとしても、それは著しくintegration を欠いたものとなり、一人の人間が自分の全存在を賭けることが困難となるのではなかろうか」（p. 147）と指摘している。また、小林（1976）は、人

間学的実存的アプローチに関して言及する中で、特に学派の人間観について触れ、次のように述べている。「これはカウンセラー自身の人間観であり、人間へのアプローチであるゆえに、他の精神分析や行動主義の生物学的人間観にとって代わるということは、少なくとも意識的にできるものではない。もしできるという人があれば、彼は、人間学的・実存的アプローチを一技法と解し、理論的に矛盾する我流の技法を用いているにすぎないか、あるいは、自己の確立していない－なぜなら価値観の確立が見られないから－便利な技術屋に過ぎない疑似的カウンセラーであろう」（p. 41）。このように、カウンセラーが自分の存在をかけてクライエントと関わるためには、カウンセリングの「枠組」・「形（型）」は統合性を持ち一貫したものである必要がある。とりわけ、その基盤である人間観は、相手や場面によって変わるようなものではなく、一貫したものであるはずである。

Ⅴ．人間観を育む

ここまでカウンセラーにとって人間観がとても大切なものであることを見てきた。それでは、人間観はどのようにして形成されるのであろうか。筆者は次の２つの取り組み、経験が特に重要であると考えている。

１つ目は、人間観には先に触れたように、自分自身の存在も含まれるということに由来する。自分自身をどのような存在として見ているのか、とらえているのかということが、その個人の人間観につながっていく。そこで、自分自身と真剣に向き合い、「自分はどのような存在であるのか、また、どのような存在でありたいのか」、「自分はどのように生きているのか、また、どのように生きていきたいのか」を深く探求し続けることが重要となる。これに関連して、井上（1979）は、心理「療法家に求められる助力的態度とは、結局、療法家自身いかに自己の精神性に目覚めているのか、そして実存的に生きることの意味を問い続けることのできる勇気をもつことであろうかと考えるのである」（p. 124）としている。また、野島（2021）は、心理療法家に必要なものは、「『人間性』７割、『専門性』（知識と技術）３割」（p. 16）とした上で、「『人間性』というのは、その人の持っている雰囲気とか価値観とか生き方とかそういうことになりますが、これが７割を占めるということなので、われわれは単に頭で勉強するだけではなくて自分の生き方を絶えず点検しながら、『人間性』を高めていくことが求められると思います」（p. 16）と述べている。

２つ目は、他者との出会いによって人間観が形成されるという側面である。私達はどのような人に出会うかによって、人間とはどのような存在であるのかという自分の見方・感じ方が変化してくる。そこで、様々な人と深く出会い、その人の在り方や生き様に触れることで、人間に対する自身の見方が見直され、掘り下げられ、より広く深いものとなっていくと考えられる。そして、様々な人と深く出会うためには、日常生活の中の出会いだけではかなり限界があり、自ら積極的に出会いを求めていくことが大切になる。そのような機会の１つに、グループ・アプローチがある。その代表的なものの１つであるエンカウンター・グループでは、様々な人から様々な経験や思いが語られ、その人の生き様やその人らしさが伝わってくることが多い（山田、2011）。筆者は大学の学部生の頃から現在までエンカウンター・グループへの参加を続けているが、グループの場で様々な方々に出会った経験は本当にかけがいのないものである。それは、私の人間に対する見方・感じ方や私自身の生き方にたいへん大きな影響を及ぼしている。また、こうしたグループ・アプローチへの参加以外にも、ボランティア活動などを通して、日常生活では接する機会の少ない方々と深く関わりを持つこともできるであろう。

さらに、上のような直接の出会いだけではなく、間接的な出会いも存在する。一丸・兒玉・塩山（2018）は、心理療法についての認知的学習の１つとして、「人間の生き生きとした内的経験的世界が表現されているものに親しむ」（p. 70）ことを上げている。その上で、「心理療法の中核は、クライアントの心理的世界に敏感になり感じとることである。だから、こうした内的世界が表現されている芸術的諸活動に親しみ、感受性を養っていくことである。小説・伝記・手記・映画・音楽・演劇・絵画・彫刻など、機会を作ってできるだけ接するようにすべきであろう」（p. 70）と述べている。

上のような取り組み、経験を通して自身の人間観を

育んでいくことに並行して、カウンセリングについて学習する際にも、重要となる点がある。それは、カウンセリングのそれぞれの学派の人間観に目を向けることである。先に述べたように、学派の理論や方法の基盤には人間観があるのであり、援助論やその方法を学ぶだけでなく、人間観をしっかりと把握する必要がある。そして、各学派の人間観を理解することができた場合には、それに続いて、自身の人間観とそれぞれの学派の人間観とを照らし合わせることが求められる。台（2011）は、個人の人間観と治療法の創始者の人間観の関係について、次のように述べている。「心理療法の場では、治療者と当の治療法の創始者との間の関わり合いが同時に生じている。もともと治療者と創始者は別人であり、それぞれの人間観も異なるわけだが、創始者の人間観は治療理論のみでなく、治療法にまで浸みこんでいるとみられる。したがって、治療者がある治療法を実施する中で、創始者の人間観との間柄が問題になる」（p. i）、「それぞれの治療者は固有の人間観をもつけれども、心理療法にはある種の人間観が浸みこんでいる。この人間観は当の治療法を初めて用いた人物－創始者－がもつ人間観を反映している。つまりある心理療法を治療者が自分に合うものとして受け入れることができるかどうかは、実は創始者の人間観との関係によるのである」（p. 6）。そして、「創始者の人間観と対照して自分の固有の人間観が何であるか、自分に真に適するのはいかなる方法かを反省し、確認したり修正したりすること」（p. 6）が大切であるとしている。このように、自身の人間観とその学派の人間観とを照らし合わせ、自分に真に適する方法を探求し、吟味することがたいへん重要となる。

人間観は短期間で形成され、でき上るようなものではない。さらに、自身の基本的な人間観が確立した後にも、それを見直し探求し続けていくことが求められる。また、自分の在り方の探求や様々な人との出会いの重要性もずっと変わることはない。従って、継続的な取り組みが重要となるが、自分と真剣に向き合い自分の在り方を探求すること、また、他者と深く出会うことにじっくりと丁寧に取り組むためには、それに集中できるだけの時間とエネルギー、そして心の余裕が必要である。それでは、カウンセラーを目ざして学習している大学生や大学院生は、それに必要な時間やエネルギー、心の余裕を十分に持つことができるであろうか。「はじめに」で述べたように、学生は多忙化し、必要とされる知識や方法を修得するだけで精一杯という状態になりやすいようにも思われる。それに加えて、学生は公認心理師や臨床心理士の資格を取得することを望んでいるため、学生の意識において資格試験に合格するための学習というところに重点が置かれやすい状況にある可能性もある。そのような状況の中で、自分の在り方を探求し、様々な他者との出会いを大切にし、人間観を育んでいくことは、簡単なことではない。人間観の重要性に気づくことができなかったり、また、気づいた場合でも、人間観を育んでいくことにしっかりと取り組むことがおろそかになってしまったりすることが危惧される。そして、そのような状況にあるからこそ、カウンセラーを目ざして学んでいる学生１人1 人は、人間観の重要性をはっきりと自覚し、自分の在り方の探求や様々な他者と深く出会うことに真剣に誠実に取り組み続けることができるかどうかが問われている。また、カウンセラーの養成に携わっている教員にとっては、学生が人間観を育んでいくことを促進できる環境や風土を創り出すことがたいへん重要な課題となる。

引用文献

江川玟成　2009　カウンセリング入門　北樹出版

一丸藤太郎・兒玉憲一・塩山二郎　2018　心理学的処遇　鑪幹八郎・名島潤慈編　心理臨床家の手引き：第４版　誠信書房　Pp. 64-143.

飯田昭人　2008　治療者の人間性・人間観が心理療法におよぼす影響について：統合的心理療法を成立させている「治療者自身のあり方」と「支持的アプローチ」を素材として　大正大学カウンセリング研究所紀要、31、19-27.

井上敏明　1979　心理療法と人間観（二）：サイコセラピーの実存心理的考察　神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要、18、111-130.

伊東博　1995　カウンセリング〔第四版〕　誠信書房

伊藤隆二　2003　間主観カウンセリング:「どう生きるか」を主題に　駿河台出版社

河合隼雄　1986　心理療法論考　新曜社
小林純一　1976　カウンセリングと人間観 ソフィア: 西洋文化ならびに東西文化交流の研究、24、364-386.
小林純一　1985　カウンセリングにおける人間観：人間学的実存的アプローチ　上智大学カウンセリング研究、9、10、3-13.
国分康孝　1980　カウンセリングの理論　誠信書房
前田重治　1978　心理療法の進め方：簡易精神分析の実際　創元社
宮崎圭子　2009　カウンセリング理論と人間観　松原達哉・松原由枝・宮崎圭子　心理学の世界・専門編3　カウンセリング心理学：生き生きとした心を取り戻す　培風館　Pp.27-64.
中田行重　2019　医療モデルの心理療法にはないＰＣＴの意義：Hawkins による被虐待児に関する論文の紹介　関西大学心理臨床センター紀要、10、85-91.
野島一彦　2021　心理療法についての私の考え　跡見学園女子大学心理学部紀要、3、1-18.
Rogers,C.R.　1951　Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications and Theory. Houghton Mifflin.（保坂亨・諸富祥彦・末武康弘訳　2005　ロジャーズ主要著作集２：クライアント中心療法　岩崎学術出版社）
澤田瑞也　1999　カウンセリングの基礎　澤田瑞也・吉田圭吾編　キーワードで学ぶカウンセリング：面接のツボ　世界思想社　Pp.1-26.
高垣忠一郎　2010　カウンセリングを語る：自己肯定感を育てる作法　かもがわ出版
鑪幹八郎　1977　試行カウンセリング　誠信書房
鑪幹八郎　2018　心理臨床家のアイデンティティと現況　鑪幹八郎・名島潤慈編　心理臨床家の手引き：第４版　誠信書房　Pp.1-19.
台利夫　2011　心理療法にみる人間観：フロイト、モレノ、ロジャーズに学ぶ　誠信書房
山田俊介　2011　ベーシック・エンカウンター・グループの魅力　伊藤義美・高松里・村久保雅孝編　パーソンセンタード・アプローチの挑戦：現代を生きるエンカウンターの実際　創元社　Pp.85-97.